

二〇二〇年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから16ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答题紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。 「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

窓に月が浮かんでいる。電気の消された暗い部屋で、ぼくはギョツとまくらをだいた。今夜は眠れそうにない。

「ねえ、父さん」

「ん〜？」

「明日が楽しみだね」

「そうか？」

「サイコーのチーズケーキ。絶対、人気メニューになるよ」
ぼくのとまりで父さんは、ぼんやり天井をながめている。

「ねえ、お父さん」

「ん〜？」

「ぼく、本当は知ってるんだ」

「なにを？」

「あのチーズケーキが完成するまで、父さんがどんなに苦労したか」

父さんはフツと息を吐いた。

「ねえ、父さん」

「ん〜？」

「あの味ってさ」

ぼくが最後まで言う前に、

「今日はおせいから、もう寝なさい」

父さんがかけ布団をかぶせてくる。

「ちえ〜」

「腹出して、寝るんじゃないぞ」

「そんなの言われなくてもわかってるよ」

父さん特製の超スペシャルチーズケーキ。明日からきっと、店の看板メニューになる。

さようならのあいさつのあと、ぼくは一番に四年一組の教室を出た。

「今からみんな野球やろうぜ」って声が聞こえても、

「良太、今日だったよね。いっしょに帰ろう」

ヒロシに呼び止められたって、ぼくは振り向きもしなかった。立ち止まってなんかいられない。

校門を出たら走り出す。今日までの日々を思い出し、青い空にガツポーズ。ピョンと高くジャンプしたら、どこまでものぼっていける気がする。

商店街までダッシュして、三軒目で足を止める。レンガ造りの喫茶店。それが父さんの店だ。

ぼくが作ったポスターも、

『ケーキ始めました』

父さんが壁にはっている。

ドキドキが止まらない。

「だれか注文してないかなあ」

胸をおさえて、店の窓から中をのぞいた。

二つあるテーブル席は、どちらもお客が座っている。ぼくの知らない人ばかりだ。話をしている顔は見えても、テーブルの上までよく見えない。背のびをしても同じだった。

カウンター席に目をうつすと、ヒロシのお父さんがいた。二軒となりで肉屋をしている。ぼくの父さんの幼なじみ。

店で売ってるコロツケやトンカツ。おじさんはいつもタダでくれる。父さんと二人暮らしのぼくにとって、親せきみたいな存在でもある。

そこで、ぼくは X。

おじさんの手元に、ケーキのつたお皿が見える。父さんとなにか話しながら、おじさんはケーキを口に運ぶ。

コーヒーを飲んで、またおしゃべり。

いつものおじさん。ニコニコわらって話をしている。う

めーな、このケーキ。なんて言っているのかもしれないな。

ぼくは店のトビラに手をかけた。グイッとおして、少しすきまができたとき。

「最近、売り上げがグンと落ちてんだ」

おじさんの声が聞こえてきた。

「近くにスーパーやコンビニが増えたからなあ」

しかめっ面をつくっている。

「魚屋も八百屋もさっぱりだって言ってるしな」

ため息まじりに、

「お前んとは、どうよ」

と父さんに聞いた。

ぼくはゴクリとつばをのむ。父さんの横顔をジッと見た。声は小さいから聞こえない。 I わらう父さん

の顔。

なんだか店に入りづらくて、ぼくはその場から動けなかった。ぼくに気づいていないおじさんは、ケーキの残りをパクリと食べた。

「まあ、こんなケーキじゃしかたねえな」

え？

ぼくは声も出なかった。頭の中が真っ白になる。胸がクーッと苦しくなった。

立ち上がったおじさんが、こっちに向かって歩き出す。ちゃんとおじさんに聞きたかった。

父さんのケーキ、おいしくなかった？

でも、胸がヒリヒリして、言葉が出ない。

「おう、良太」

って声が聞こえたけど、ぼくはにげるようにして走り出した。

おじさんなんか大嫌いだ！

心の中でそう叫んだ。

鼻の奥が痛くなって、目が II 熱くなった。勝手に涙がこみあげてくる。

こんなケーキじゃしかたがないって……。

どうして、そんなひどいこと、おじさんは父さんに言ったんだ。

うそだ、うそだ、うそだ、うそだ。

何度も何度も失敗して、一年かかって完成した父さん特

製のチーズケーキ。あれは死んだ母さんの味なんだ。

なのに、ひどい。ひどすぎるよ。

だれもない公園で、ようやくぼくは足を止めた。ベンチに座って、肩を落とす。ハーツと息をはきだしたとき。

「良太」

後ろから声が聞こえてきた。

「なにやってるんだよ」

ふりむかなくても、だれだかわかる。ヒロシだ。

「おじさんのケーキ、どうだった？」

足音がどんどん近づいてくる。

「ランドセルをおいたらすぐ、『校庭に集合しよう』だって

さ。良太もいっしょにやるだろ？ 野球」

ヒロシが悪いわけじゃない。悪いのは、ヒロシのお父さんだ。そんなことちゃんとわかっている。頭の中ではわかっているけど……。

「お前となんか」

ぼくの口が勝手に動いた。

「いっしょに野球したくない」

ヒロシはおっとりした性格で、ぼくとは正反対の人間だ。

「お前と同じチームになったら、負けるに決まっているからな」

ヒロシはなにも言わなかった。どんな顔かは想像がつく。困ったときの八の字まゆげは、小さいときからかわらない。

「良太……」

ヒロシのつぶやきが聞こえたけれど、ぼくは目も合わせなかった。心臓がバクバクあばれている。くちびるをかみしめて、ヒロシを残し公園を出た。

ぼくたちは幼なじみ^B。おじさんと同じことをしただけだ。

ぼくの家は店の二階だ。商店街にもどってみると、長い行列ができていた。先頭は、にくい肉屋の前。

「いらっしやい、いらっしやい。タイムサービスが始まるよ〜」

メガホンをもったおじさんが、お客をどんどんよびよせている。

「まあ、半額？」

「ここのコロッケ。おいしいのよ」

さらに列は長くなった。

ぼくは奥歯をギョツとかみしめ、喫茶店の前まですすむ^C。店をのぞこうなんて思わない。おじさんの声が耳の奥でこえました。

『まあ、こんなケーキじゃしかたねえな』

ぼくは両手でほっぺをこすり、裏口から直接家上がった。たたみにゴロンと寝転んで、ハーツと長いため息をはく。

明日もまた、父さんはケーキを作る気なのか？

おじさんに、あんなことを言われても？

ワーツと叫びたくなったとき。

「良太〜。ちよつとはやいけど、飯にするぞ〜」

父さんが一階からぼくを呼んだ。

お客のいない店に入る。ぼくはカウンターのすみに座った。父さんの顔を見たくなかった。

「今日はすごい行列だったなあ」

スパゲティーを作る父さんが、明るい口調でぼくに言う。

「ヒロユキには、かなわねえな」

おじさんのことだ。

ほくは父さんの顔をゆっくり見上げた。目を細めて笑っている。ほくにはさっぱりわからない。ケーキにケチをつけられたこと。父さんはくやしくないの？

「いくら幼なじみだからって、父さんは人がよすぎるよ」

「え？」

D
父さんが目を丸くした。その目を店の入り口にうつす。

「おお。飯の時間に間に合ったな」

おじさんが店に入ってきたんだ。

「売れ残りで悪いけど」

エプロン姿で、白いお皿をカウンターに置く。

「良太に食わせてやろうと思ってるな。高級黒毛和牛だぞ」

おじさんはニヤニヤ笑っている。驚いたのは、ほくだ

じゃない。

「なんだ。今日は大はんじょうじゃなかったのか？」

父さんも口をポカンと開けた。

おじさんは顔の前で手をふって、

「残念ながら、売れるのは安いコロツケばかりだ」

肩を上げて、顔をしかめる。

「しかたがねえよな。この景気じゃ」

え？

ほくの心臓が Ⅲ ゆれる。聞き覚えのある言葉。

『まあ、こんなケーキじゃしかたねえな』

「あゝ！」

ほくは声を張り上げた。

「おじさん。ケーキじゃなくて、景気だったの？」

おじさんは首をひねって、まゆげをよせる。

「良太。お前、何言ってるんだ？」

そして、目を見開いた。

「ケーキといえば、良太の父ちゃんはりっぱだな。あんな

にうまいケーキを作るんだから」

ほくのかみをグシャグシャにする。

「なつかしい味だったなあ」

「お、おじさん」

ほくの胸が高鳴った。

「でしょう。父さんのケーキ、サイッコーでしょう」

おじさんはウンウンとうなずいている。

「ああ、最高のサイッコーだ。あのケーキで、この商店街

も盛り上がるぞ。不景気なんかふきとばす、あれは世界一

のケーキだからな」

ほくはプツとふきだした。

「いくら幼なじみだからって、世界一は大げさだよ」

父さんもハハハとてれわらい。ワツハツハとわらうおじさんの声に、ぼくの気持ちが晴れていく。

「大げさなもんか」

「そうかなあ」

ぼくはおじさんと父さんを交代に見た。ごうかいにわらうおじさんと、てれわらいを浮かべるぼくの父さん。二人は正反対の人間だ。正反対だからうまくいく。って……。

「あ〜っ！」

ぼくは大変なことを思い出した。

「どうした。良太」

「おじさん。ヒロシ、どうしてる？」

「それがなあ。学校から帰ってから、あいつ、全然元気がないんだ」

「マジ？」

「良太。ヒロシになにがあったか、知らないか？」

「そ、それが……」

ヒロシの顔は想像がつく。まゆげをハの字にしているのだろう。ぼくがヒロシにひどいことを言っちゃったから。

「ど、どうしよう」

ヒロシにちゃんとあやまろう。でも、なんて言えばいいんだろう。

「そうだ！」

カウンターの奥へ回る。いのるような気持ちで、冷蔵庫を開けた。

「よし！」

一つだけ、たった一つだけ残っていた。父さん特製の超スペシャルチーズケーキが一つだけ。

ぼくは父さんをふりかえる。父さんはだまってうなずいた。親指を立てて、ぼくにむける。ぼくも同じかつこうをした。

二軒となりの肉屋の前。

「ヒ〜ロ〜シ〜」

ぼくは二階に向かって声を上げた。小さいころと同じように。

「ヒ〜ロ〜シ〜」

窓がガラガラとゆっくり開く。ヒロシがそこから顔を出した。まゆげをハの字にまげている。下くちびるをツンとつき出して。

ぼくはケーキがのったお皿を見せて、

「さつきはごめ〜ん。おわびに、はんぶんこして食べよう
ぜ〜」

片手を大きくふってみせた。

「ちよつと待つて〜」

ヒロシが頭をひっこめる。ぼくは、ありがとうつて心で
言った。

空に浮かぶ丸い月を、ぼくは父さんと並んで見る。

「ねえ、父さん？」

「ん〜？」

「ぼく、母さんがいなくても、もうさみしくなんか
ないか。父さんのチーズケーキは母さんの味だもん」

父さんが短い息をはく。

「ねえ、父さん」

「ん〜？」

「ヒロシのお父さんと、キャッチボールしたことある？」

「そうだなあ。オレたち、幼なじみだからな」

明日はぼくからさそうんだ。いっしょにキャッチボール
しようぜつて。

「ねえ、父さん」

「今日はおそいからもう寝なさい」

「ちえ〜」

^G 今度はぼくが受け止めるんだ。どんなボールが飛んでき
ても、ぼくもキャッチしてみせる。だってぼくらは幼なじ
み。父さんとヒロシのおじさんみたいに、いつかきつとな
りたいんだ。

(白矢三恵「キャッチボール」による)

問一 —— 線部 A「今日までの日々を思い出し、青い空にガツポーズ。ピョンと高くジャンプしたら、どこまでもほつて
いける気がする」とあるが、このような気持ちになっている理由を説明しなさい。

問二 空欄 X にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 息をのんだ
- イ 舌をまいた
- ウ 目を細めた
- エ 眉をひそめた

問三 空欄 I く III にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ジンと
- イ トクンと
- ウ くしゃつと

問四 ——線部B「おじさんと同じことをしただけだ」とあるが、「同じこと」とはどのようなことを指すか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア あえて嘘をついて相手が困ることを言うこと
- イ 友情を試すために幼なじみに悪口を言うこと
- ウ 相手が傷つくだろうことを面と向かって言うこと
- エ 幼なじみに対して遠回しな表現で嫌味を言うこと

問五 ——線部C「ぼくは奥歯をギュッとかみしめ、喫茶店の前まですすむ」とあるが、良太はどのような気持ちでいるか。具体的に説明しなさい。

問六 — 線部 D「父さんが目を丸くした」とあるが、その行動の理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 店に入ってくるのが誰だか確かめようとしたから。

イ 息子にほめられたうれしさをこらえきれなかったから。

ウ 息子の言葉が急で意外なものだったのでおどろいたから。

エ 息子の言っている意味がわからずごまかそうとしたから。

問七 — 線部 E「ぼくの気持ちが晴れていく」とあるが、その理由を説明しなさい。

問八 — 線部 F「父さんはだまっとうなずいた。親指を立てて、ぼくにむける」とあるが、この行動には、良太のお父さんのどのような気持ちが表れているか。説明しなさい。

問九 — 線部 G「今度はぼくが受け止めるんだ。どんなボールが飛んできても、ぼくもキャッチしてみせる。だってぼくらは幼なじみ」とあるが、良太は幼なじみのヒロシに対してどんな覚悟かくごができたのか。その理由も含めて、七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえば、数日後に大事な用事があるとします。私たちは事前に「電車が止まったらどうしよう」とか「台風が来たらどうしよう」「熱が出たらどうしよう」など、さまざまな可能性を頭に浮かべ、それらを考慮して「このくらいの時間に家を出よう」「天気予報を確認しておこう」「体調管理に気をつけよう」などと対策をとろうとするでしょう。しかし、「宇宙人が攻めてきたらどうしよう」「東京に超大型地震が来たらどうしよう」といったことまでは考えませんね。人間は無意識のうちに、実際に起こりそうなことと、まず起こらないだろうことに境界線を引いているのです。

AIにはその線引きができません。人間が本能的にしている線引きに何か共通のルールがあるわけではないので、人によって線を引き位置は違います。だから、想定する範囲が狭い人が広すぎる人は **a** と言われ、想定する範囲が狭すぎる場合は、 **b** といわれてしまうわけです。このように基準がないものはAIに教えることができないので、AIは今も線引きができないのです。

ではAIはどうするか。AIはなまじ記憶力がよいの

で、これまで教えられてきた「こういうときはこうしなさい」「こうなったらこうして……」ということ全てを覚えています。その全てを羅列し、全ての可能性について、どうすべきかを考えます。その結果、場合の数が **c** にな数になり、時間までに答えを導き出すのが間に合わない、ということが起こります。つまり想定する範囲が広すぎて、何も決定できずに終わってしまうのです。

「時限爆弾のジレンマ」*をご存じでしょうか。時限爆弾を処理しなければならぬとき、残り時間が有限なのに、時限爆弾とはどういふものから始まり、処理の仕方や、それをどう運ぶか、誰かを犠牲にしなくてはならない場合はどうするか……といったあらゆることを考えて何もできないでいるうちに、時間が来て時限爆弾が爆発してしまう、という話です。AIではそのようなことが実際に起こってしまうわけです。しかもAIが賢くなればなるほど想定範囲が広くなり、問題はより深刻になります。それにもかかわらず、教師側である人間の方でもまだ、どのように線引きを教えればよいかかわかっていないという状況です。

(中略)

これはAIがダメというより、逆に人間がすごいのだということもできます。私たちの脳は全ての状況を想定することなどできないので、考えなくてよいことを無意識に*間引けてしまいます。AIの研究が進めば進むほど、人間があまりあれこれ考えずに、フツとそれをできてしまうことがいかにすごいことなのか、それを **d** に組み立て直して機械に教えることがいかに難しいことなのかがかわかってきました。AIが追いつくかと思うと、人間のすごさがもつと見えてきて、また引き離^{はな}されてしまう。今、AI学者はそんな蟹^C気楼^{しんきろう}を追いかけるような状況の中にいます。

(中略)

AIが人間と会話するときに問題となることとして、**e** な概念^{がいねん}が持てない」ということも挙げられます。一問一答でやりとりすることはできるので、お客様サポートのように話の内容が限られている領域の中では、聞かれたことにきちんと答えられます。しかし、「そうそう、さっきの話だけど……」などと言われた途端^{とたん}に、AIにはもうわからなくなってしまうです。

人間は相手に「さっきの話だけ」と言われたとき、これ

まで自分たちが話したところのある全ての話題を参照しながら、「さっきの話」を見つけ出すわけではありません。人間は無意識のうちに過去の記憶を並^{なら}び替^かえて間引き、あの辺りのことを聞くようにしているのではないかと推測し、文脈的に「最初の雑談のときのラーメンの話だな」と当たりをつけるわけです。もちろん外れることもあります。皆さんも会話の中ではそうしているはずですが、皆^{みな}

〔X〕、AIは生真面目に全てを記憶(記録)しているので、付き合いの長い人が相手であれば、数年、十数年分、あるいは何十年分の全ての会話の中から、「さっきの話」との関連性を探すことになります。しかも、重要な仕事の話も、人間ならすぐに忘れるようなどうでもよい雑談も、AIには全てが等価^Dなので、ますます探すのが大変です。AIにわかるようにいうには、「さっき」ではなく「五分前くらい」と指定しなくてはなりません。

また、人と話していて、「どうしてこの人はこの話ばかりしているんだろう？」と思うようなことがあると思いますが、そのとき人間は、この人が今話していることと過去に話したことには何か関連があるのだろうかと考え、過去の話や相手の性格とつなぎ合わせて話の意図を読み取る

うとします。

人間は特別なトレーニングなどしなくても、そういうことができてしまいますが、実はそれはかなり高度なことです。AIモデルでも過去を参照して学習するモデルが始められています、まだ十分な能力ではありません。

しかし、人間のように絶妙なファイルリングは、そう簡単には実現しないでしよう。

E AIが日常生活に入ってくるようになれば、人間と自然な会話ができることが求められますが、AIにとってそれは大変難しいことです。

今は多くのゲームが海外での発売も前提としているので、ゲーム内での会話を生成したら販売先の国に合わせてローカライズします。このとき、AIによって言葉を生成するとすると、言語ごとにはほぼ一から作り直しになります。そう説明するととても驚かれるのですが、会話をするAI、これを「自然言語処理系AI」といいますが、自然言語処理AIの学習は、言語にとっても依存しているのです、学習過程において言葉の壁が意外に高く、言語が変わると途端に通用しなくなるのです。最近では音声できちつとしゃべれるAIが増えているので、人間との会話は実現目前の

技術に思えるかもしれませんが、そう簡単にはいきません。

特に日本は島国で、これまで他国の言葉の影響をあまり受けなかったためか、日本語はとても不規則な言語になっていきます。主語を必要としないところも単純な翻訳を妨げますし、文字もカタカナ、漢字、ひらがなと三種類もあります。さらに、単語と単語の区切りを空きスペースなどで区切らないため、「ぎなた読み」の問題もあります。

ぎなた読みというのは文章の区切りを間違えて読むことで、「弁慶が、なぎなたを持って」と読むべきところを「弁慶がな、ぎなたを持って」と区切りを誤って読んだことが由来とされる問題です。「Y」、「ここではきものをぬいでください」とあったときに、「ここでは、着物を脱いでください」なのか「ここで、履物を脱いでください」なのかを判断するのが難しいのです。「せいじかのおしよくじけん」は「政治家の汚職事件」に決まっています、「政治家のお食事券」ではありませんが、それも小さな子どもにはわかりません。

英語の場合は単語と単語の間にスペースが入るのでこういう問題は起こりませんが、日本語には句読点しかなく、

ひらがなかカタカナだけで書かれた場合、単語の区切りが非常にわかりにくいのです。小学校一年生の教科書では、語の間にスペースを入れて分がち書きにされていますが、そこからも漢字を使わないで書かれた日本語を読む難しさがわかると思います。

そういった文から意味を読み取る時には、一般常識と照らし合わせて、瞬時に「お食事券ではなく汚職事件」と判断し、「海にいるか」と書かれていれば「海にいる蚊」ではなく「海にイルカ」だと、やはり常識から判断します。膨大な一般常識のバックボーンを持たないと漢字変換すらできないわけです。

もう一つの難問は、「ボールペン持っていますか？」という質問の意味は何か、というようなことです。誰でも、ボールペンの一本や二本は持っています。質問者は、ボールペンを保有しているかを聞きたいのではなく、「ボールペンを貸してください」といいたいわけですね。普通に常識のある人なら「持っています」と答えず、「ええ、貸しましょうか」とか「すみません、持っていないません」と答えます。「パソコンを落としておいてください」というのも、文字通りガッシャーと落とすのではなく、パソコン

ンの電源を落としてください、という意味ですね。そのような意味的な飛躍や語の省略も、AIには理解が難しいです。

(森川幸人『イラストで読むAI入門』による。なお、問題文の一部を省略している。)

【注】

*なまじ——十分と言えるまでには達してはず、中途半端な状態のこと。

*ジレンマ——二つの仮定の間で、板挟みの状態になってしまうこと。

*間引けて——取り除くことができ

*フィルタリング——取捨選択のこと。

*ローカライズ——その国に合わせた仕様にすること。

*バックボーン——根幹、基礎知識、予備知識のこと。

問一 ——線部A「人間が本能的にしている線引き」とあるが、どこに線を引いているのか。解答欄うんに合うように本文中から二
十五字以内で探し、その最初と最後の三文字を抜き出して答えなさい。

問二 空欄 と にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 心配性だ イ ちよつと考えが足りない人だ

ウ 無責任だ エ ちよつと自分勝手な判断をしすぎる人だ

問三 空欄 にあてはまる最もふさわしいことばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 個人的 イ 時間的 ウ 爆発的 エ 論理的

問四 「X」と「Y」にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ だから ウ たとえば

問五 ——線部B「何も決定できずに終わってしまう」とあるが、AIが何も決定できない理由を、「記憶力」・「可能性」・「時間」という本文中の言葉を必ず用いて説明しなさい。

問六 ——線部C「蜃気楼を追いかけような」とあるが、これはどういう状況を言い表した比喻か。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア AIの技術には今後まだまだ夢を託せる可能性がたくさんあるので、苦勞を苦勞とも思わないような状況。
- イ AIの技術は結局日進月歩なので、自分の研究が本場に優れた成果をあげているのか確信を持ってない状況。
- ウ AIの技術はどうせ人間を越えることはできないので、結局かなわぬ夢を追いかけているだけという状況。
- エ AIの技術を進歩させ人間に追いついたと思っても、なかなかたどり着いたとは言えない繰り返し返しの状況。

問七 ——線部D「AIには全てが等価」とあるが、ここで言う「等価」とはどういうことか。わかりやすく説明しなさい。

問八 ——線部E「AIが日常生活に入ってくるようになれば、人間と自然な会話ができることが求められますが、AIにとってそれは大変難しいこととあるが、これより後の段落で日本語独自の特色から「それは大変難しいこと」の理由が説明されています。その理由を五つ探し、それぞれ箇条書きで説明しなさい。

三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① ランオウ だけ取り出すのは難しい。
- ② 合格目指して勉強に ツトめる。
- ③ メンミツな打ち合わせが行われた。
- ④ 黒板にジ シャクで地図をとめる。
- ⑤ コナユキが降ってきた。

